

空調新思想大系

続・設備デザインの世界

その
6

新空調戦略概論

●文・イラスト
野部達夫 | 工学院大学

空調は前世紀の建築の急激な成長に同期して資本と人材が投入され、その作法が確立したかに見える。ところが産業としての成熟を迎えた今、次の一手に力強さが無い。この閉塞感をもたらす教条主義を打破するために、新たな発想を提唱したい。

他業界の高等戦術

最近流行るCEOたちのシリコンバレー風プレゼンテーション、かなり無理があります。何も世間に顔の売れていない企業トップが舞台上でブラブラしながら新製品を自ら説明することもないと思うのですが、これはどなたかの入れ知恵でしょうか。そんなの何遍も練習するヒマがあったらもっと大事なことを考えていただきたいものです。

ところで、テレビの気象情報も正確に伝えることが使命だとすれば、昔のように多少不細工でも喋るのが本業のアナウンサーに任せるのが筋だと思います。これも天気予報業界の裾野を広げる策略かもしれません。裁判員制度も、民間の感覚を反映させるべきは立法でありまして、司法に民意を入れたらぐだぐだになってしまいますが、これも司法関係者の謀略でしょう。

愚生、ひねくれておりますので夜毎酒場でこのように穿った見方をして楽しんでおりますが、困ったことに空調設計業界にはこのような高等戦術が見当たりません。

業界の地位が向上しないワケ

空調関係の業界、最近アベノミクスで株価は底上げされているようです。それに連動して業界の地位が向上するかというところもいわず、全くの別物でございます。これはひとえに将来に対する布石を打つような先を見越した戦術がないのではないかと愚生勘繰っております。自ら地位向上を声高に叫んでも、世間はハイそうですかというわけにはいかず、声を囁きただけ無駄というものです。考えれば当たり前のことです。

この手応えの無さの原因を一杯やりながら考察してみますと、①工学とはほかから与えられた命題を解くことを性とし俯瞰的でない本質があり、②空調勃興期の何でもありのよき時代の印象があまりにも強く尾を引いており、③その結果縦割り分業体制に慣れきって新境地を模索する気概が喪失し、④上流の業界からはどうにでもなる従順な業界と見くびられ、⑤地球環境問題やコンプライアンスなどという反論不能な恒真命題を楯に外部から弄られまくり、⑥従って仕事は忙しくなるばかりでもうからず責任ばかりが重くなり、⑦業界から笑顔が消え、⑧元気な新人が来なくなり、⑨…と、考え出すと切りがありません。

負の連鎖からの脱却

このスパイラルを断ち切るためには、どこから手を付ければよいのでしょうか。①はまず工学教育の根本の議論なので時間がかかるでしょう。②はもう少しでその年代もリタイアするので放っておけば宜しい。③はアイデアの問題でその気になればできそうです。④の被虐趣味はなかなか治らないでしょうが、これも気概の問題かと。⑤は論理学を語る人が業界に少ないのが弱点ですが、その気になればこれも何とかなりそうです。⑥、これもわれわれ特有の被虐趣味に通じ、忙しいのが存在の実感と勘違いする向きが多いようです。時には考えることの悦びも実感してほしいものです。⑦は今すぐ笑顔基調に切り替えればすむことで銭も

かかりませんが、これは意外と難しい。もはや宗教の世界かもしれません。⑧は⑦および④⑥あたりに連動していると思われませんが、空調設計者を主役にしたレンディードラマでもつくっていただくと宜しいかもしれません。もう構想は出来ております。主役：満島ひかり、同僚：野間口徹、課長：片桐はいり、部長：松重豊、社長：岸部一徳、食堂のオバチャン：あき竹城、でお願いします。サスペンドラマでは駄目です。

上位概念の醸成

以上の対策はどれも重要なことで可能であれば並行して進めたいのですが、それぞれのアクションを束ねる上位概念が必要です。最近愚生は大佛次郎の「天皇の世紀」にはまり全12巻という大部と日夜格闘しておりますが、幕末の日本の右往左往を長らく「考えること」を禁じられてきた公家と武家社会の限界と示しております。そんなことからつらつら思うのは「旗印」の役割です。先の選挙でも哲学をおもちでない皆様の右往左往をお見受けしましたが、人間存在のレンディートルまで突き詰めて考えておかないと旗印は鮮明にならず、代議制民主主義は成立しません。先生方でなくてもわれわれもおれない哲学をもつことは非常に重要であります。哲学を語るなどと言うと昔の高踏主義と混同されるかもしれませんが、これは方便のための方便ではなく、理想を実現するための方便なのです。「われわれは何のために生きるのか」という深甚な問題は、酒場で気が大きくなって議論するにはうってつけであります。

企業活動への文化の影響

われわれは国内のビジネスが手詰まりになるとすぐ海外への展開を画策しますが、一旦海外の皆様の気持ちになって事の是非を考えてみる必要があります。当方としては国内で培ったノウハウを海外に教えて差し上げれば感謝されてもうかると短絡しがちですが、逆の立場で考えると風土に馴染まないビジネスをねじ込まれた不自然さはそのうちに痛手となるでしょう。異なる文化をもつ国々にはそれぞれの理由があるわけで、それをないがしろにしては侵略になってしまいます。特にわが国は「ガラパゴス」と形容される程(ガラパゴスには失礼ですが)島国であり鎖国政策をとってきた歴史があります。江戸時代は遠い時代と皆様お思いでしょうが、そのDNAは脈々と皆様にも受け継がれております。「考える」事に対する距離感、「独創」に対する嫌悪感もその一端かも知れませんが、今時の若者は該当しないとお思いの向きも有るかもしれませんが、愚生から見ればジャニーズもチョンマゲが似合います。また、外国企業がわれわれの業界に参入しにくいのも文化的障壁のお陰でしょう。考えようによっては有難いことであります。

反省

CEOでもないのに思わず無様な訴え方をしてしまいました。大変失礼致しました。それにしてもそろそろわれわれのニュービジネス、どなたかに考えていただかないと手詰まりになってしまいます。世のCEOの皆様、何卒宜しくお願い申し上げます。頓首再拝。



早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程修了。
1983年清水建設、2001年工学院大学建築学科助教授を経て、2004年～同教授。
日本空調冷凍研究所理事長。建築設備技術者協会会長

のべたつお

空調新思想大系

続・設備デザインの世界

その5

空調設計ブラック上等

◎文・イラスト
野部達夫 | 工学院大学

空調は前世紀の建築の急激な成長に同期して資本と人材が投入され、その作法が確立したかに見える。ところが産業としての成熟を迎えた今、次の一手に力強さがない。この閉塞感をもたらす教条主義を打破するために、新たな発想を提唱したい。

前口上

愚生、現在は実務から遠ざかりすっかり大学という口説の徒に成り下がっておりますが、かつて某社で設備設計に携わっておりました。最近実務の皆様の話を(酒場で)謹聴しますと、当時の働きぶりとは大分違う様子で、こんなので若い人は元気が出るのかと心配です。そこで今回は空調設計にまつわる就労環境について考察を加えてみたいと思います。

うなされる記憶

いまだに30年も前の夢にうなされることがあります。筋はほぼ決まっていますが、朝目覚めると最早完全に遅刻、慌てて入社すると自分の机が見つからず、仕方がないので昼近くに出社する先輩の机を借りて美濃紙に製図板とT定規で平面図を裏トレースするのですが、どうしたわけかいつも椅子が見つからず中腰です。

しかし、平社員でありながら平気で昼頃入社する猛者もいたのですから、愚生もたまに注意されることもありましたがクビにもならず、今から見れば牧歌的な時代でした。

ムチャクチャでござりまするがな

当時は出先から夕方帰社するとそれから打ち合わせや製図をしだし、夜も更けると近くの飲み屋で待ち構える課長から「早くこっちへ来い」とお呼びが掛かります。もう終電寸前というタイミングで最後の一升瓶が発注され、残業代はタクシーやカプセルホテルに上納されていたのでした。当時のカプセルホテル、狭い上に酔っ払いがエロ映画を大音量で見ながら眠ってしまうのでとても仕事をする環境ではなかったのですが、何しろ課長は前夜に飲みに来いと誘っておきながら翌朝には「あれは出来たか」とおっしゃるので平社員は仕事のリスク管理が大変でした。

冗長性の大切さ

当時のオフィスは数百人を擁する設計部でさえワープロが数台あるのみで、内線電話は4人に1台、図面のコピーは湿式で、機械の機嫌が悪いと原因がズタズタになってしまいました。従って仕事のそこかしこに万一のアクシデントに備えるための冗長性があり、そのお陰でアクシデントがなければいろいろ余計なことができたのでした。現在の無駄を排除してしまった働きぶりに比べたら労働の生産性は低いとされるのですが、この余計な隙間はいろいろな配慮やコミュニケーション、自己研鑽に活用され、個人と組織の総合力を高めていたと不良社員なりに感じておりました。設備設計のようにあらゆる可能性を検討しなければならない気配りの職種では上司が暇そうに振る舞うことは実に大切なことで、気軽に声を掛けたり些細な相談をしやすくする雰囲気醸成していたものでした。

TQCという紅衛兵

ところが、こんな牧歌的な職場もTQC (Total Quality Control、総合品質管理)というクロフネにぶち壊されてしまいました。これは製造業の生産ラインなどを改善する手法だったはずですが、建設業界もどこからか入れ知恵されてこぞって導入してしまったのです。思えば突然会社に紅衛兵か藤原禿が乗り込んできたようなもので、潜在的な無駄をさらに容赦なく排除してしまい、前述のような隙間の時間は大方削られてしまいました。

ファイリングでドメを刺される

そうこうしているうちにISO9001という品質マネジメントシステムの嵐が社内に吹き荒れました。これは人をまるで信頼しない性悪説に基づく管理手法で、宗主国が植民地を統治するのと同じ発想です。殊にクリエイターを自認する当時の空調設計者とは明らかにそりが合わず、自分なりの工夫や個性は認められないわけです。

特にファイリングという資料を一元管理する強制はいけませんでした。今でもやっている会社があるかと思いますが、まことにご苦労なことです。情報を他人が見ても理解できるカタチに整えるための余計な手間は、隙間の時間を完全に食い潰してしまいました。愚生が前職を辞めた一因はこれにあります。一人ひとり顔かたちが違うように仕事の仕方にも個性があるわけですが、個性をないがしろにする方針には強烈な拒絶反応が生じました。

企業の社会的責任

昨今はいろいろな会社からCSR (corporate social responsibility) レポートなる小冊子が送られて来ます。各社苦勞してつくっているようですがどれも似たり寄ったりで、担当の皆様には気の毒ですが自発性のかけらもなく読むだけ損です。私企業に過剰な社会的責任を負わせる相手は一体誰でしょうか。よもやFXなどを弄ぶ投機筋ではありません。しかし、各社のレポートは発注者や建物ユーザーへ訴える内容はほとんどなく、どれも一点の曇りもない健全経営で確実な投資先であることのアピールをしているに過ぎません。内部統制や情報セキュリティなど、社員の自由度を削ぐ窮屈な縛りを威張ってどうするのでしょうか。

CS (customer satisfaction、顧客満足) というのも、相当怪しげです。ビジネス書で見るマーケット・インとかいうニーズ志向と、同根ですかね。『顧客』という漠とした対象から自分たちの企業活動を導いてもらおうという態度は極めて他律的であり、こういうマヤカシはいい加減にやめてほしいものです。

お疲れの企業経営

確かに私企業も大きくなり過ぎると社会性を帯び、余計な面倒を見なくてはならなくなる道理なのでしょう。以前シューマッハのスモール・イズ・ビューティフルという本がブレイクしました。それには企業の肥大化に関する問題点がこれでもかと列挙されていますが、組織もヒューマンスケールを大きく超えると、多様な価値観を金銭に置き換えないと衆議が一致しないのかもしれない。この金銭への価値の翻訳、非常に怪しいものです。建設業はある程度資本力がなくて経営が難しい業種ですが、船頭多くして船山に上る式の会社が多いのは由々しき問題です。

しかし、役所ではないのですから、もっと経営者は外部からのビジネス指南に頼らずに好き勝手を徹底的に貫いてほしいものです。それにシンパシーを感じて覇気のある新人が門戸を叩くか、あるいは市場がついてくるかどうかは別の問題であり、興隆するのも淘汰されるのも天命でしょう。今どきの経営者には心の底からふつふつと沸いてくる熱い血潮はないのでしょうか。社員の皆様もすっかり依存体質になってしまい、自分の判断を避けてマニュアルに頼り、早晚AIに置き換えられる準備を怠りませんが、精神の自由、組織との距離感は大事にしたいものです。

反省

かつてブラック企業とは裏社会とつながりのあるヤバイ会社を指した言葉ですが、いつの間にか自分の気に入らない労働環境の会社を指すようになりました。空調設計はもっと裁量権のある仕事はずで、形式的な労働統制はこの産業の衰退を招くのは明らかです。秋も深まってきましたのでどうぞ皆様旨い肴で酒でも呑みながら、この辺りのことを論じていただければと存じます。頓首再拝。



のべたつお

早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程修了。

1983年清水建設、2001年工学院大学建築学科助教授を経て、2004年～同教授。日本空調冷凍研究所理事長。建築設備技術者協会会長